

文学教材の授業活性化の試み

— 芥川龍之介「羅生門」の教材研究 —

渡 辺 春 美

はじめに

文学教材による授業を豊かに活性化するにはどうすればよいのであろうか。授業の活性化の方法を、ここでは、「羅生門」を例に、「教材研究」の中に探ってみたいと考える。

文学作品の「教材研究」の意味については、次のように述べられている。¹⁾

物語・小説によらず広く文学作品の教材研究は、作品研究をしつづけたものに、さらに児童・生徒に学習させるという条件下で考察を加えることだが、こうして教師の行った教材研究は、実際の授業で児童・生徒の読みによって修正される。そしてその結果は次の授業のための作品研究、教材研究に生かされていく。以上のように作品研究、教材研究、授業はサイクルをなしている。
(傍線は引用者)

この中で、「教材研究」は、十分な作品研究の上に、教育的観点から考察を加えることとされている。それは授業によって修正され、その結果は次の授業に生かされていく。授業の成否は大きく教材研究にかかっていると見えよう。文学教材の授業活性化に果たす教材研究の役割は極めて大きいと考えねばならない。

教材研究は、「指導案」に集約され、具体化される。文学教材の授業活性化のための教材研究として、ここでは既に終えた「羅生門」の授業の実際を中心に問題点を明らかにし、その集約としての「指導案」を作成することにする。指導案は、吉本均氏の「呼びかける指導案」の考えに立って作成したい。

I 「羅生門」授業の実際（一九八九年度の授業より）

(1) 教材観

・ 確固とした価値基準を持ち得ず状況に左右されなが

ら生きる人間の姿が巧みな構成と表現を通して描かれている。

・エゴイズムに走ることはエゴイズムによって報復される。にもかかわらず、極限状況の中では、そうせざるを得ない人間の弱さ、悲しさ、愚かさが描かれている。

(2) 指導目標

- ① 文章表現の巧みな箇所に着目し、その効果を考える。
 - ② 各場面の状況をしっかりと押さえる。
 - ③ 各場面の登場人物の心情と行動をその背景とともにしっかりと読み取る。
 - ④ ①②③に基づき、各場面をありありと想像しながら読む。
 - ⑤ ①②③④の目標を達成することで、人間性についての理解を深める。
- (3) 指導の工夫

- ① 授業への積極的参加を促す工夫
- ア 「学習目標明示」・「学習課題」——授業内容の中心と学習の方向を示し、授業の流れをつかみ易くすることで、授業への積極的参加を促すことをねらいとした。

イ 「一読総合法を取り入れた読み」——通読を行わず、場面ごとに読み進めることで、生徒の興味・関心は深まり持続する。この興味・関心の深まり

を積極的参加に結び付けたいと考えた。

(2) 読み取りの工夫

ア、「学習課題」——課題によって、場面の中心的内容をあらかじめ自分で読み取らせることをねらいとした。

イ、「読み取りノート」——登場人物の行動と心情を中心にあらすじを記入する欄と、場面ごとの感想を記入する欄を設けた。記入させることで、読みを確かなものとし、自己の考えを持つことができるようにしたいと考えた。

ウ、「板書」——発問と板書を連動させることを考えた。生徒の考えを拾いあげながら、作品が構造的に理解できるような板書を心がけた。

(4) 指導計画

- ① 対象・時期 一年生四クラス(各四八名)・三学期
 - ② 学習計画 一場面(二時間)、二場面(二時間) 三場面(二時間)、四場面(二時間) 五場面(二時間)、感想(二時間)
- (5) 指導過程

- ① 導入、学習目標の明示、読み取りノート配布、学習方法の説明
- ② 一場面学習課題配布、音読(通読は行わない)
- ③ 学習課題への取り組み
- ④ 学習課題を踏まえながらの場面のまとめ

【参考1】

羅生門(課題4)

() 組 () 番 氏名 ()

学習課題

【五場面】

(P. 89, L. 1-11 終わり)

- ① 「ある勇氣」はどのような勇氣か。また、それはどのようなことか。
- ② 「きつとそうか。」の「そう」は、どのようなことを指しているか。
- ③ 「おさげけるような声」とあるが、下人はどのような声で老嫗をおさげけるのか。
- ④ 「黒洞々たる夜」はどのようなことを象徴していると考えられるか。
- ⑤ 下人は今後どうなっていくのか想像してみよう。

<p>主な疑問・留意事項</p>	<p>坂 音</p>
<p>↑「ある勇氣」はどのような勇氣か。また、それはどのようなことか。</p> <p>↑「きつとそうか。」の「そう」は、どのようなことを指しているか。</p> <p>↑「おさげけるような声」とあるが、下人が老嫗をおさげけるが、下人が老嫗をおさげるのはなぜか。</p> <p>①老嫗をおさげられるような風かなことをしたのか。</p> <p>②下人はどのような考えに立って引割をしたのか。</p> <p>↑「黒洞々たる夜」はどのようなことを象徴していると考えられるか。</p> <p>下人は今後どうなっていくか想像してみよう。</p> <p>☆巧みな表現を抜き出し、その効果を発表させる。</p> <p>☆「読み取りノート」に記入。</p>	<p>老嫗の弁解(論理)</p> <p>ある勇氣</p> <p>仕方なくする→悪でない 仕方なくする→許される</p> <p>「きつとそうか。」</p> <p>おさげけるような声で 手を押した</p> <p>弁解 引割</p> <p>老嫗 下人</p> <p>引割→老嫗の荷物をはきとる</p> <p>例の庭へ駆け下りた</p> <p>黒洞々たる夜</p> <p>無秩序な世の中 悪の象徴</p> <p>下人の人生</p> <p>(どうなるかわからない)</p> <p>下人の行方は誰も知らない</p>

⑤ 読み取りノートへの書き込み

(各場面ごとに②～⑤を繰り返す)

⑥ 感想文(定期考査)

(6) 授業の実際

次に五場面についての授業の実際(参考I)を示す。

授業は「(5)指導過程」の②～⑤に従って行った。

II 「羅生門」の授業の実際から見た問題点

1、 場面ごとの読みの感想に見られる問題点

通説を行わず、場面ごとに読み進め、まとめ終わるごとに各場面の感想を「読み取りノート」に書かせた。各場面ごとの感想の多いものから五つを選びまとめたのが次の表である。

(「羅生門」各場面ごとの感想——一年四組の場合)

場面	感想
一 場面	<p>① 不気味な羅生門で何かが起こりそう。興味が湧く。</p> <p>② 文章表現が巧みで優れている。</p> <p>③ 下人はなぜ人の寄り付かない羅生門にいるのか。</p> <p>④ 私なら不気味な羅生門に一人ではおれない。</p> <p>⑤ 驚くばかりの京都と羅生門の荒廃。</p>

五 場面	四 場面	三 場面	二 場面
<p>⑤ 窮地に立つと悪をなす人間。</p> <p>④ 「黒洞々たる夜」——下人の人生・悪・人心の荒廃。</p> <p>③ 許されない。</p> <p>② 下人の変化——ショック・仕方がない・怖い</p> <p>① 老婆(人)の言葉によって変わる人間の脆さ。</p>	<p>⑤ さびれ方、荒廃のひどさがわかる。</p> <p>④ 表現が巧だ。</p> <p>③ 老婆の様子・態度がよくわかる。</p> <p>② 下人の心——変化に驚き・速い・勝手にわかっていく。</p> <p>① 老婆の弁解——説得的・しかたがない・疑問。</p>	<p>⑤ 老婆の不気味さ。⑥ ソツとする不気味な光景。</p> <p>④ 表現が巧みだ。</p> <p>③ 死骸のあるところに下人はよくいられるものだ。</p> <p>② 下人の激しい憎悪——正義感に感心。</p> <p>① 下人の心の変化——変化に驚く・速い・不思議・深く考えていない。</p>	<p>⑤ 下人の途方に暮れる気持ちがかかる。</p> <p>④ はしごに上ったその先が楽しみ。何かありそう。</p> <p>③ 表現技巧が素晴らしい。</p> <p>② 羅生門に上るなんて私にはできない。気が知れない。</p> <p>① 飢え死にか盗人かというのは難しい問題。盗人もやむを得ぬ。</p>

右の場面感想から問題点を拾い出すと次のようにならう。
ア 「一場面」の「③④」によると、生徒は、なぜ下人が不気味な「羅生門」にいるのかということに疑問・こだわりをもち続けている。

イ 「二場面」の「②」によると、生徒は、下人が羅生門に上ることが納得できないとしている。

ウ 「三場面」の「①」、「四場面」の「②」によると、

下人の心の変化に疑問を抱いている。

エ 「三場面」の「②」を見ると、生徒は、合理性を欠いた「激しい憎悪」・「悪を憎む心」に感心している。

オ 「五場面」の「①」から、生徒は、下人の行方に強い関心をもっていると言える。

2、授業後の感想文に見られる問題点

次に生徒の感想を一例示す。(傍線は引用者が施した。)

今、自分が下人と同じ立場だったら、下人と同じことをしていたと思う。それどころか最初から、今の世の中を生き抜くには盗人にならなきゃ生きていけない、という結論に達していただろう。中学生の頃、乱世の時代に憧れた。その状況になったらどうするかは、分からないが、これからの下人の人生、俗に言うその日暮らしというものを見てみたかった。その頃の自分にとって、すばらしくかつこの良いものに思えた。老

婆の話をよむと必ず思うのだが、人間の本性を見ている気がする。私は老婆の言い訳も下人の選択も間違っただものではないと思う。あれこそが真の人間の姿であると思う。そして、自分自身の本当の姿なのだと思う。

(女)

生徒は、極限状況において、人は生きるために手段を選ばぬというところにエゴイズムを見、それを「人間の本性」、「真の人間の姿」としている。ここに二つの問題を感じる。

ア 老婆と下人の行為を直ちに普遍化し、極限状況において、生きるために手段を選ばぬのが人間であると考えること。

イ 極限という一つの状況を切り離し、人間の本性に帰納すること。

3、読み押さえが不十分であった点

ア、下人の人物像

「1」で示した各場面の感想文の「三場面」の「②」にも見られるが、「盗人になることを」積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた、「あらゆる悪に対する反感」、「悪を憎む心」といった語句から、下人を「善人(男)」、「正義感が強く(男)」、「とてもしっかりした考えをもっている人(女)」と捕らえている。

語句の意味する内容が文脈の中でしっかりと捕らえられていないことによると考えられる。

イ、老婆の弁解（論理）と下人の決意・行動とのつながりを押さえることが不十分であった。「老婆の着物はぎとった。」(P40, 16)と着物のみを奪っている点をも押さえるべきであった。

ウ、「あざけるような声で念を押した。」(P40, 14)のあざけりには誰に向けられたものか。この点を押さえることによって、硬直しがちな「羅生門」の読みにゆきぶりをかけ、理解を深めることができるであろう。

4、授業の実際から見た作品の問題点

ア、表現内容の問題

・ 死か盗人かで悩む下人に、追い詰められた様子が見られない。

・ 下人の心理変化に唐突な印象を受ける。「激しい憎悪」・「あらゆる悪に対する反感」・「悪を憎む心」が燃え上がる様子は、その前の下人像とはつながりにくい。

・ 表現が分析的、説明的すぎる。

・ 「おし」という差別用語の扱い。

イ、鑑賞の問題

・ 極限状況における人間のエゴイズム、人間の弱さ、人間の愚かさ、善悪の相対化といった観点からの鑑

賞が多い。極限状況という設定が思考を強く制約し、揺さぶりによって認識を深めることも相対化することも難しい。状況設定そのものが作品の奥行きをかつて狭く浅いものにしていているきらいがある。

5、教科書「学習の手引き」の実際の問題点

平成二年度用の「羅生門」を掲載している八社十一種の教科書について調べてみた（参考Ⅱ）。全体として、入門期教材という観点から、場面分けし、場面ごとの下人の心理と行動を把握し、表現について考え、主題について考えることで人間性についての理解を深めるということに配慮している。しかし、内容把握に関して生徒がつまづく点——例えば、「悪に対する反感の理由」、「老婆の答えに失望した理由」、「老婆の論理と下人の決意」——については、多くの教科書で、手引きが用意されていない。本校生徒の読みの実態から一般化する事はできないが、生徒の読みの実態が十分に把握されていないのではないかと思われる。

Ⅲ 「羅生門」の指導案

1、指導案の観点

吉本均氏は、すぐれた授業作りのために「働きかけⅡ学びとる」指導案づくりが決定的に重要（P63）だと述べる。この「働きかけⅡ学びとる」指導案は、その著書

のサブタイトルになっている「呼びかける指導案」と同義である。この指導案づくりにおいて大切な二点を、吉本氏は、次のように述べている。

第一には、「教えねばならない」ものを「教えたい・語りたい」ものにする^{こと}、つまり、教師が教材解釈
Ⅱ 認識を確立することである。
第二には、その「教えたい・語りたい」ものを、子どもたちの「学びたい」ものへと転化・発展させる工夫、つまり、一連の発問づくりである。

吉本氏は、教師の主體的な「働きかけ」を、「学びとる」という子どもの主体的活動に転化・発展させる工夫として、「発問づくり」を重視する。その発問について次のように述べる。

発問とはなにか。

それは、教科書内容の一点への指さしによって、子どもたちからの応答を予想することである。端的にいえば、次のとおりである。

語りかけ↓問いかける

- ① つまづきを予想する
- ② 対立・分化を予想する
- ③ からみ合い・きりかえしを予想する

①②③を予想した教科内容の一点の指さし——発問が、「子どもたちの身（既知・五感）にきり結んで」（同書 p82）、主体的活動を促し、「対立・分化のイメージをおこ」（同）し、新しい発見やより深い認識に至らせる。そこに発問の力（機能）があるのである。「呼びかける指導案」はこの発問の力（機能）を生かし、教師の主體的な「働きかけ」を、「学びとる」という子供の主体的活動に転化・発展させることで生徒を新しい発見やより深い認識に至らせるためのものと言える。

このような指導案の観点から、次に「羅生門」の指導案を作ってみた。

2、「羅生門」学習指導案の実際

(1) 教材観

「羅生門」の主題については諸説があり、この作品によって教える内容についても様々である。私は、次の二つの観点から羅生門を扱いたいと考える。一つは、人間について考え、理解を深めるための教材としてであり、二つは、表現を押え、読みを深め、考え味わうことで小説の読みのおもしろさを実感させるための教材としてである。

私は下人の心理変化を通して、中心となる価値基準をもち得ず、状況に左右されて生きる人間の姿を見る。また、死か盗人かという追い詰められた状況の中で下人は、エゴを正当化する老婆の言葉に、「きつと、そうか。」と「あざ

けるような声で念を押し、「すばやく老婆の着物を剥ぎ取り、「黒洞々たる夜」に消えて行く。このような老婆と下人の姿を通して、極限状況における人間のエゴイズムが描き出される。そのエゴを正当化する者は、同様にエゴを正当化する他の者によって犯されるといふ、「エゴの輪廻」につながれる。老婆は、まさしくエゴ正当化の論理によって下人に犯される。下人が老婆から着物しか奪わない（『今昔物語』では、髪と死人の着物も奪っている）ところに象徴的にそれが表れている。下人も例外ではない。「黒洞々たる夜」の中で待ち受けるのは、老婆同様の運命ではあるまいか。「羅生門」の最後の一行の改稿もこのような含みを持たせるためであると私には思われる。

下人は、「あざけるような声で」老婆に念を押し。しかし、エゴを正当化する老婆の論理を踏襲する下人のあざけりは、当然ながら下人にもはねかえる。そのように考えるとき、あざけりは、エゴを正当化して生きようとするすべての人間の愚かしさに向けられているといえよう。

「羅生門」は人間を考えさせる作品だと言える。ただ、短絡的な人間観に陥らぬよう配慮を要する。

「羅生門」の世界は優れた、計算された表現によって創造されている。時にそれは、あまりに人工的な感じさえするくらいである。表現を押さえ、その一語一語の機微に触れるかどうかで作品世界の深淺が大きく変わる。「羅生門」は、表現、構成を押さえ、内容を読み深めることがそのま

ま小説の読みのおもしろさにつながる教材ともいえる。

(2) 指導目標

① 各場面の状況を押さえ、登場人物の心情や行動を読み取る。

② ①に際しては、生徒のつまづき、読み誤り、読み落としなどを予測し、読みの方法の中に位置付け、読みを深める。

③ 読むことを通して人間への理解を深める。

④ 文章表現の巧みな箇所に着目しその効果を読み味わう。

(3) 指導計画

① 教材——「羅生門」（高等学校 国語Ⅰ 三訂版 大修館書店）

② 指導対象・時期・形態——一年A組・二学期・一斉指導

③ 計画——「I」の「4」に同じ

④ 指導過程——「I」の「5」に同じ

(4) 本時（一場面——一時間目）の指導案
「本時の目標」

① 下人を取り巻く状況がどのように設定されているか表現を押さえて読み取る。

② 下人はどのような人物で何をしているか読み取る。

③ 巧みな表現を抜き出し、その効果を考え味わう。

<p>主な発問・留意事項</p>	<p>主人公として、学習目標を示し、学習方法を説明 ①学習課題「読み取りノート」(省略)配布 ②学習課題「読むこと」(110)</p> <p>①時どのような印象を持ったか。 ②学習課題を習きまじめなさい。 ③どのように状況が設定されているか。 ④時代はいつか。平安のいつ頃か。 ⑤季節はいつか。どうしてわかるか。 ⑥「ある日の暮れ方」とすることでどういふ効 果があると思われるか。</p> <p>①場所についてはどのように設定されているか。 ②羅生門およびその周辺の様子はどうだろうか。 (表現を押さえて発表) ③「広い門」とあるがどのくらいだと思うか。 ④羅生門の位置について説明 ⑤なぜもう三人はいそうなものなのか</p> <p>①京都の町の様子はどうか。 ②仏像仏員を模して「新の料に売つていた」と いふ物はどういうことを表しているか。 ③打ち砕くことが君ならできるか。</p> <p>①このような状態になつた事情を詳しく説明しな さい。 ②登場人物についてできるだけ詳しく説明しな い。 ③下人はどのように描かれているか。 ④服装はどのか。年齢はいつか。 ⑤何をしているか。 ⑥「この男のほかに誰もいない」のはどういふ 事情からか。</p> <p>①このように不気味な羅生門になぜ下人はいるの だろうか。 ②この作品ではなぜ下人がこにいるように設定 したのか。</p> <p>①羅生門の荒廃は何を意味しているか ②一人の下人がそこにいる意味は？ ③羅生門は朱雀門と呼称し、仏力で都を守ってい る。それが荒廃している。下人はそこにいるこ とを考えさせる。 ④表裏効果に着目し読み取りノート記入</p>
<p>書(計画)</p>	<p>羅生門 芥川之介</p> <p>時―ある日の暮れ方 (簡筆)</p> <p>①場面 ②場面</p> <p>①時―ある日の暮れ方 (ざりきりす)</p> <p>②「謎手の興味を引く ③謎手の謎を引く ④何かこれら趣こりそうな算附気を出す</p> <p>場所―荒廃した羅生門―広い門の下</p> <p>①丹塗りのばげた氣柱 ②荒果来た ③狐狸・盗人が住む</p> <p>①雨 ②一匹のきりぎりす</p> <p>①生活の苦しさ ②生活の苦しさ ③生活の苦しさ</p> <p>①信心の荒廃 ②信心の荒廃 ③信心の荒廃</p> <p>①地獄 ②土風 ③飢饉 ④大火事</p> <p>人物―(ほかに誰もいない) ①下人―雨や女を待つていた ②洗ひざらしの紺の襦 ③右のほおびにきびき―若君 ④下人は羅生門になぜいるのか</p> <p>①なぜ下人が羅生門にどのように設定されている のか ②このように不気味な羅生門になぜ下人はいるの だろうか</p> <p>①羅生門の荒廃 ②人心の荒廃の象徴 ③社会的規範の衰退 ④下人―どう生きるか、どうなるか (大回)</p>

注 ↑は発問 ①②…は補助発問
 ☆は留意事項

〔参考Ⅲ〕の指導案傍線部の発問は、「Ⅲ問題点」の「1、場面ごとの読みの感想に見られる問題点」の「ア」の、「下人が不気味な羅生門にいることに対する生徒の疑問・こだわりを考慮した発問である。この生徒の疑問・こだわりを生かした発問によって、「羅生門」冒頭部の状況設定の意味に生徒を迫らせることができるのではあるまいか。仏力の衰退、人心の荒廃、社会的規範の衰退という社会状況の中に下人（次場面を読めば、下人に追い詰められた状態が明らかに）は置かれている。下人は、そのような状況の中をどう生きるのか。これが「羅生門」冒頭の状況設定の意味であろう。それは、また、当然ながら「羅生門」の主題につながる状況設定ともなっている。

次に五場面の発問について考えることにする。

（五場面）

↑「ある勇氣」(P39, L13~14) どのような勇氣か
↑それは、どのような考え(論理)によって生じたのか。
↑「きつとそうか」(P40, L3) の「そう」はどのようなことを指しているか。

ア、↑「あざけるような声で」(P40, L4) とあるが、あざけつたとしたら誰をあざけつたのか。

イ、↑下人はなぜ老婆の着物しか奪わなかったのか。
〔今昔物語〕では髪と死人の着物を奪っている)

↑老婆の「つぶやき」を想像して書いてみよう。
↑「黒洞々たる夜」(P40, L16) はどういう意味が込められているか。(どういうことを象徴していると考えられるか)

ウ、↑下人はどうなっていくと思われるか。

発問「ア」は、「Ⅲ問題点」の「2、授業後の感想文に見られる問題点」で見た、極限状況において生きるために手段を選ばぬのが人間の本质であると直ちに普遍化する考え方、および、「3」の「ウ」で示した読み押さえが不十分であった点を押さえた発問である。発問「イ」は、「3」の「イ」を念頭に置いたもので、発問「ア」と通底している。発問「ウ」は、「1」の「オ」を考慮した。発問「イ」は老婆が蛇売り女に対してしたことを、下人が老婆に対してしたことを明らかにすることを意図した。自己のエゴを正当化すれば、他の正当化されたエゴによって犯されることを覚悟しなければならぬ。エゴの正当化は「エゴの輪廻」を生むのである。極限状況下において、人間はエゴに生きざるを得ないかも知れない。しかし、それを正当化するかどうかは別ものでなければならぬ。発問「ア」については、それを問うことで、下人のあざけりが老婆のみならず、老婆のエゴ正当化の論理を踏襲する下人自身にもはねかえることを明らかにするものである。そうであれば、あざけりは、エゴを正当化する人間のご賢しさに対するも

のと考えられる。

「羅生門」には、極限状況下での人間のエゴイズムが描かれる。それは、正当化されることで猛々しいものに変わって行く。その行き着く先は、「エゴの輪廻」である。あざけりはその愚かしさに向けられるのである。あざけりは、あざけりでしかあり得ず、建設的な意味をもつものではない。しかし、下人の「あざけるような声」に着目することで、思考を強く制約する、「極限状況下の人間のエゴイズムは人間の本質であり仕方がない」正当化」という構図を相対化し、作品を重層的に読む視点を得ることができよう。

おわりに

文学教材の授業活性化のための教材研究として、「羅生門」の指導案作りを試みた。吉本均氏の「呼びかける指導案」の考えに立ち、「教えたい・語りたい」ものを生徒の「学びたい」ものに転化するために、発問中心に指導案を作ってみた。発問を作るにあたっては、一九八九年度の「羅生門」の授業を分析し、生徒の興味・関心、疑問、つまづき、読み誤り、読み落としを考慮した。そうすることで、生徒の興味・関心と学習意欲を高め、「羅生門」の読みを広く深いものにしたと考えたことによる。さらに、それらの発問に対する生徒の反応を予想することによって、板書をも計画してみた。

今、過去の授業の反省を教材研究に生かすことで、多少なりとも授業の可能性が開けた思いがする。授業実践に学ぶことの大切さが実感される。しかし、「教えたい・語りたい」ものを生徒の「学びたい」ものに転化できたかどうかについては心もとない。吉本氏の述べる「対立・分化」、「からみ合い・きりかえし」を引き出す発問についても十分なものとなつた。ご助言いただければありがたい。

(一九九一年 一月二日稿)
(大阪府立和泉高等学校教諭)

注1 田近洵一 井上尚美編「国語教育指導用語辞典」

(教育出版) 一六六頁

注2 吉本均「授業成立入門——呼びかける指導案の構想

——」(明治図書)

注3 同六三頁

注4 同六三頁、六四頁

注5 同六八頁

注6 浮橋康彦先生「芥川龍之介『羅生門』・『鼻』」(国語教材研究講座 高等学校「現代国語」第一巻 有精堂) 一五八頁